

(45)	ことわりや	39	(1)	めぐりあひて	11
(41)	なにしこの	37	(5)	いづれぞと	14
(37)	桃といふ	34	(9)	あらし吹く	16
(33)	こちかぜに	32	(13)	時鳥	18
(29)	みづうみに	29	(17)	難波がた	21
(25)	ここにかく	26	(21)	いそがくれ	23
(21)	いそがくれ	23	(18)	あひみむと	22
(17)	難波がた	21	(14)	はらへどの	19
(13)	時鳥	18	(10)	もみち葉を	16
(9)	あらし吹く	16	(6)	西の海を	14
(5)	いづれぞと	14	(2)	泣き弱る	11
(46)	春のよの	40	(38)	花といはは	34
(42)	夕霧に	37	(34)	いひたえは	32
(38)	花といはは	34	(30)	方の海に	29
(34)	いひたえは	32	(26)	をしほ山	27
(30)	方の海に	29	(22)	かきくもり	24
(26)	をしほ山	27	(18)	あひみむと	22
(22)	かきくもり	24	(14)	はらへどの	19
(18)	あひみむと	22	(10)	もみち葉を	16
(14)	はらへどの	19	(7)	西へ行く	15
(10)	もみち葉を	16	(3)	露しげき	12
(6)	西の海を	14	(11)	霜こほり	17
(2)	泣き弱る	11	(15)	北へ行く	19
(3)	露しげき	12	(19)	ゆきめぐり	22
(7)	西へ行く	15	(23)	しりぬらん	24
(11)	霜こほり	17	(27)	ふる里に	27
(15)	北へ行く	19	(31)	くれなゐの	30
(19)	ゆきめぐり	22	(35)	たけからぬ	33
(23)	しりぬらん	24	(39)	いづかたの	35
(27)	ふる里に	27	(43)	ちる花を	38
(31)	くれなゐの	30	(47)	さをしかの	41
(35)	たけからぬ	33	(4)	おぼつかな	13
(39)	いづかたの	35	(8)	露ふかく	15
(43)	ちる花を	38	(12)	ゆかずとも	17
(47)	さをしかの	41	(16)	ゆきめぐり	20
(4)	おぼつかな	13	(20)	みをの海に	23
(8)	露ふかく	15	(24)	おいつしま	25
(12)	ゆかずとも	17	(28)	春なれど	28
(16)	ゆきめぐり	20	(32)	とちたりし	31
(20)	みをの海に	23	(36)	をりてみば	33
(24)	おいつしま	25	(40)	雲のうへの	36
(28)	春なれど	28	(44)	なき人に	39
(32)	とちたりし	31	(48)	見し人の	41
(36)	をりてみば	33			
(40)	雲のうへの	36			
(44)	なき人に	39			
(48)	見し人の	41			

紫式部集

目 次

紫式部集

凡 例

(49)	よとともにも……	42	(50)	かへりては……	43	(51)	たが里の……	43	(52)	をりからを……	44
(53)	さえぬまの……	45	(54)	わか竹の……	45	(55)	かずならで……	46	(56)	心だに……	47
(57)	うきことを……	47	(58)	わりなしや……	48	(59)	しのびつる……	49	(60)	けふはかく……	49
(61)	かげみても……	50	(62)	わするるは……	51	(63)	たが里も……	51	(64)	くれぬまで……	52
(65)	たれか世に……	52	(66)	なき人を……	53	(67)	あまのとの……	53	(68)	まきのとも……	54
(69)	をみなへし……	54	(70)	しら露は……	55	(71)	ましも猶……	56	(72)	名にたかき……	57
(73)	心あてに……	57	(74)	けぢかくて……	58	(75)	へたてじと……	58	(76)	みねさむみ……	59
(77)	めづらしき……	59	(78)	くもりなく……	60	(79)	いかにいかが……	61	(80)	あしたづの……	62
(81)	をりをりに……	62	(82)	霜がれの……	63	(83)	いるかたは……	63	(84)	さして行く……	64
(85)	おほかたの……	64	(86)	垣ほあれ……	65	(87)	をすすきが……	65	(88)	よにふるに……	66
(89)	心行く……	67	(90)	おほかりし……	67	(91)	身のうさは……	68	(92)	とちたりし……	69
(93)	み山べの……	69	(94)	みよし野は……	70	(95)	みかさ山……	71	(96)	さしこえて……	71
(97)	むもれ木の……	72	(98)	ここのへに……	72	(99)	神世には……	73	(100)	あらためて……	73
(101)	めづらしき……	74	(102)	さらば君……	75	(103)	うちののび……	75	(104)	しののめの……	76
(105)	おほかたを……	76	(106)	あまのかは……	77	(107)	なほざりの……	77	(108)	よこめをも……	78
(109)	なにはかり……	79	(110)	たづきなき……	79	(111)	いとむ人……	80	(112)	恋しくて……	80
(113)	ふればかく……	81	(114)	いづくとも……	81						

日記哥

(1)	たへなりや……	82	(2)	かがり火の……	83	(3)	すめる池の……	84	(4)	なべて世の……	84
(5)	なにごとと……	85	(6)	菊の露……	85	(7)	水鳥を……	86	(8)	雲まなく……	86
(9)	ことわりの……	87	(10)	うきねせし……	88	(11)	うちらはらふ……	88	(12)	としくれて……	89
(13)	すきものと……	90	(14)	人にまだ……	91	(15)	よもすがら……	91	(16)	ただならじ……	92
(17)	よのなかを……	92									

補遺

I 実践女子大学蔵本にあり、陽明文庫蔵本及び日記歌にない歌

(1)	つれづれと……	93	(2)	ひとりゐて……	93
-----	---------	----	-----	---------	----

II 現存『紫式部日記』にあり、実践女子大学蔵本・陽明文庫蔵本ともにない歌

III 他の文献資料に記載されている歌

(1)	ありし世を……	95	(2)	雲の上を……	95	(3)	心ざし……	96	(4)	かき絶えて……	97
(5)	奥山の……	98	(6)	憂きことの……	98	(7)	雪積もる……	99	(8)	ながむれば……	100

『紫式部集』解説

紫式部日記
凡例

紫式部日記（上段の頁が「本文・注釈編」に、下段の頁（ゴシック体）が「現代語訳」にそれぞれ該当する）

〔一〕	初秋の土御門殿邸（寛弘五年八月）	121	〔二〕	五壇の御修法	122
〔三〕	道長と女郎花の歌を贈答	123	〔四〕	殿の息子三位の君頼通の姿	124
〔五〕	碁の負態	124	〔六〕	八月二十余日、宿直	125
〔七〕	八月二十六日、弁宰相の君の昼寝姿	126	〔八〕	九月九日、菊の綿の歌	127
〔九〕	九月十日、産室に移る	128	〔一〇〕	九月十一日の暁の加持祈祷	130
〔一一〕	人げおほくこみては	131	〔一二〕	御いただきの髪おろしたてまつり	133
〔一二〕	いとませさせたまふほど	134	〔一四〕	午後、男御子誕生	135
〔一五〕	例の渡殿より見やれば	136	〔一六〕	御膳の緒は殿の上	137
〔二七〕	夜さりの御湯殿	139	〔一八〕	九月十三日夜、中宮職主催の御産養	140
〔一九〕	九月十五日夜、五日の道長主催の御産養	141	〔二〇〕	御膳まゐるとて	142
〔二二〕	御膳まゐりはてて	144	〔二二〕	上達部、座を立ちて	146
〔二三〕	九月十六日夜、舟遊び	147	〔二四〕	九月十七日夜、朝廷主催の御産養	148
〔二五〕	九月十九日夜、頼通主催の御産養	150	〔二六〕	道長、初孫を抱く	151
〔二七〕	土御門殿邸への行幸近づく	152	〔二八〕	十月十六日 土御門殿邸行幸	154

〔一九〕	十月十六日 御帳の西面	155	〔三〇〕	御簾の中を見わたせば	156
〔三一〕	かねてより、主上の女房	158	〔三二〕	管絃と御遊	160
〔三三〕	十月十七日 行幸翌日の中宮の御前	161	〔三四〕	宰相の君たちと月を眺める	163
〔三五〕	十一月一日 誕生五十日	167	〔三六〕	上達部の座は	168
〔三七〕	五十日祝の「おそろしかるべき」宴	172	〔三八〕	豪華本源氏物語 内裏還御へ	175
〔三九〕	はかなき物語	177	〔四〇〕	ころみの物語	178
〔四一〕	ただえ去らずうちかたらひ	179	〔四二〕	十一月十七日、中宮還御	181
〔四三〕	細殿の三の口に入りて	182	〔四四〕	道長から中宮への贈物	183
〔四五〕	十一月二十日丑の日、五節の舞姫	184	〔四六〕	寅の日、五節の舞姫、御前の試	185
〔四七〕	かからぬ年だに	188	〔四八〕	二十二日卯の日、五節の舞姫、童女御覽	188
〔四九〕	二十三日辰の日、豊明節会	190	〔五〇〕	五節過ぎの寂寥の日々	193
〔五一〕	十一月二十八日下酉の日、臨時の祭	194	〔五二〕	十二月二十九日、初出仕の日	196
〔五三〕	十二月三十日の夜、追儺の夜	197	〔五四〕	正月三日 若宮の御戴餅	199
〔五五〕	宰相の君、小少将の君、宮の内侍、式部のおもと	202	〔五六〕	宮の内侍	203
〔五七〕	小大輔、源式部、小兵衛、少弐	204	〔五八〕	宮城の侍従、五節の弁、小馬	205
〔五九〕	かういひいひて	206	〔六〇〕	されど内裏わたりにて	209
〔六一〕	これらをかく知りて	210	〔六二〕	今はやうやうおとなびつせたまひ	211
〔六三〕	宮の大夫	213	〔六四〕	和泉式部	215
〔六五〕	赤染衛門	215	〔六六〕	清少納言こそ	216

〔六七〕 風涼しき夕暮……………	217	〔六八〕 よろづの事、人によりてことごとくなり……………	219
〔六九〕 それ、心よりほかの面影……………	220	〔七〇〕 さまよう人はおいらかに……………	221
〔七二〕 日本紀の御局……………	223	〔七二〕 いか言忌みし侍らじ……………	226
〔七三〕 消息文の結び……………	227	〔七四〕 十一月の暁……………	228
〔七五〕 源氏の物語……………	230	〔七六〕 正月元日 敦成・敦良親王たちの御戴餅……………	232
〔七七〕 正月二日初子の日 臨時客……………	233	〔七八〕 正月十五日 敦良親王御五十日の祝い……………	236
〔七九〕 戴餅の儀……………	238	〔八〇〕 主上は平敷の御座に……………	240
	310		311

『紫式部日記』解説……………

紫式部略系図……………

土御門第(上東門院) 図・平安京(左京拡大) 図……………

平安京図……………

312 316 317 318

紫式部集

凡例

- 1 本書は『紫式部集』、『紫式部日記』の全注釈である。ただし、大学での講読演習、市民講座にも使用されることを想定して注釈は簡便を旨とした。
- 2 『紫式部集』の本文校訂、注釈、現代語訳は廣田収が担当し、上原作和が補訂を加え、全体の統一を図った。
- 3 底本に古本系の最善本である陽明文庫蔵本を用い、併せて定家本系の最善本である実践女子大学蔵本との異同を示した。なお、諸本間の異同は省略した。また、本文校訂は次のような原則に基づいて行った。
 - (1) 漢字を宛てることはできるだけ控え、かな書き中心に表記を整えた。
 - (2) 濁点や句読点、歴史的かな遣いや送り仮名など、その他表記を整えた。
 - (3) 衍字や脱字については最小限の範囲で訂した。また、見せ消ちや補入などについては、傍記された表現を採って訂したものがあがるが、その場合はいずれも、原文を欄外注に示した。
- 4 各歌ごとに注釈、現代語訳を施した。なお、必要な場合に補注を巻末に付した。
- 5 所収歌が他の文献に収載されている場合は、注釈の冒頭に文献名と歌番号だけを記した。『新編国歌大観』(角川書店、一九八三―一九九二年)に拠って記したが、詞書や歌の表現の異同は省略した。

現代語訳

返事

ひとり座って涙ぐんでいる水面に、さらに浮き加わる憂鬱な影はいったいどれでしょう。それが私の影です。

II 現存『紫式部日記』にあり、実践女子大学蔵本・陽明文庫蔵本ともにない歌。

(1) 『紫式部日記』(6)。

播磨の守碁の負けわざしける日、あからさまにいでて、後にぞ御盤のさまなど見給へしかば、華足などゆゑゆゑし
くて、州浜のほとりの水に、かきませたり。

紀の国のしらの浜にひろふてふこの石こそはいはほともなれ

扇どものをかしきを、その頃の人々持たり。

注釈

播磨の守 未詳。／碁の負けわざ 碁に負けた者が勝った者に饗応すること。／華足 飾りの付いた碁盤の脚。／州浜 饗応の飾り物に用いる島台。州浜の景を描くことでこの名がある。／しらの浜 紀伊国白浜。名所。天禄四(九七三)年、円融院資子内親王乱碁歌合「心あてに白良の浜に拾ふ石の巖とならむ世をしこそ待て」を本歌とするという(『紫式部日記』岩波文庫)。石が巖に成長することをもつて長壽・繁栄を言祝ぐ賀歌。負けわざの場の詠歌。／扇どものをかしきを 饗応に参加する女房たちの用いる趣向を凝らした扇。

現代語訳

播磨守が懸け碁の負けた饗応をした日、わずかばかりの間退出して、あとで碁盤のようすを拝見しますと、碁盤の脚などは由緒深く造作しており、州浜のほとりの水に(次のような歌が)書き混ぜられてあった。

紀伊国の白良の浜に拾うという碁石は、君が御代が石が巖となるまで(久しく)あるように祈りたい。

III 他の文献資料に記載されている歌。

扇どもの趣深いものを、そのころの女房たちは持つておりました。

(1) 『続古今集』哀傷、一四〇一番、〔参考〕『栄花物語』岩蔭巻。

一条院の御事ののち、上東門院枇杷殿へ出でたまうける日よみ侍りける

紫式部

ありし世を夢にみなして涙さへとまらぬ宿ぞかなしかりける

注釈

一条院の御事 一条帝の四九日追善の法要。寛弘八(一〇一一)年六月二二日崩御。／上東門院 中宮彰子。一条院崩御後、出家して院号を賜った。／枇杷殿 もとは基経の邸宅で、道長が伝領。一条院焼亡後、『御堂関白記』では一〇月二六日に、上東門院は枇杷殿に移居している。／ありし世 一条帝在世時。／とまらぬ宿 一条院御所。「とまらぬ」は涙が止まらないことと、一条院から枇杷殿に移ることを懸ける。

現代語訳

(崩御された) 一条院の御法事のあと、上東門院(中宮彰子)が(道長の) 枇杷殿へ行啓された日に詠みました歌。

紫式部

院の御在世中のことは、夢だったと思いきらめても、涙さえ止まらないだけでなく、御殿も移られて名残りさえとどめることのできないことが悲しいことであつた。

(2) 『栄花物語』日蔭の鬘巻

はかなくて司召のほどにもなりぬれば、世には司召とのしるにも、中宮世の中を思し出づる御気色なれば、藤式